

秘書室をお願いした。後援の担当は教育委員会ということでそちらへもお願いに行き、また国際交流室にも出向いた。具体的案件については、参加者に配布するパンフレット等を頂くため、新しくできた市の国際交流会館内のコンベンション・ビューローを訪れ、また市バスの使用について交通局へ出向いた。

ほかにもいろいろ思い出があるが、紙数が一ぱいになったので、ここで筆をおく。

(あらき ふじひろ・京都大学数理解析研究所)

ICM 90 が終わって

飯 高 茂

ほっとしているところなので、なるべく簡単な報告ですませたい。私の担当した主な仕事は、広報委員会の活動と募金の事務であった。以下思い付くままに6項目にまとめるが、その他に細かい仕事が色々あり充実した3年間をすごすことができた。

1. シンボルマークの公募、選定、仕上げること

ICM 90 のシンボルマークのデザインを公募することになり、雑誌‘数学’、数学セミナー、その他流通ジャーナル等に公募の知らせを載せて一般からの図案を求めた。その結果169人の方が232点の作品を寄せてくれた。応募者は全国に亘り、また年齢のスペクトルは15から80にまで及ぶほど幅広かった。大学の数学教師、数学科学生はいうにおよばず、農業、自営業、公務員、更に専門のデザイナー5氏も作品をよせた。応募者に対して、毎回返事を書き、統計をとるのは存外面倒な仕事であった。そのため、応募作品を返却するという仕事をしなかったのは、申し訳ないことであった。1987年9月29日にICM 90 広報委員会で選考し青木一芳氏(中央大学理工学部)の作品を入選とした。作品は‘京’という文字を石燈籠風にデザインしたものである。‘京’は、会議開催地の地名であり、又数字とみると、10の16乗を表し3重の意味をもたせたものであった。これを、(日本評論社に關係している)グラフィックデザイナー駒井佑二氏が、最終的なデザインに仕上げた。氏は、縦置きデザインの他に横置きデザインもつくられた。これらは会議の色々な文書の表紙、切手、ポスターなどに用いられた。特にICM 90 記念Tシャツのデザインとして活用された。デザインを全国から公募したことは、記念切手の発行を申請するときに役立つことになった。なお、原案者の青木氏には30,000円、デザイナーの駒井氏には50,000円を差上げた。破格に安い費用ではあったが、商業目的でないこと、マークは世界中で記憶されることを理由に納得していただいた。3重の意味をもたせたシンボルマークは好評であり、新聞の報道で傑作マークの例として数学セミナーなどの科学雑誌はもとより、朝日、東京などの新聞に数回に亘り取り上げられた。

2. ICM 90 数学会特別募金

企業法人から募金をするに先だちまず日本数学会会員から募金をすることになった。

会員諸氏の協力のおかげで目標額3000万円以上のところ1987年11月から1990年8月までで

入金総計は ¥44,194,606 寄付者人数=1138 寄付平均額=¥38,835 標準偏差=¥69,112 に達した。寄付額のベスト3は110万円, 99万円, 80万円であった。寄付額の多い月は12月, 1月であり, ベスト3を月別入金額とともに示せば, 次の通りであった。

87年12月 3,700,000円 88年1月 3,463,000円 89年1月 2,636,000円

3年にわたる募金の事務はかなりの負担になった。実はこの仕事が避雷針の役にたつことを秘かに願ったのだが, 結果的には諸々の仕事の誘蛾灯になってしまった。

3. 企業法人対象の寄付関係の仕事

この仕事はなれないことであるし, 失敗が許されない質のものである。募金活動中には身震いするような緊張状態を幾度か経験したが, 終わって印象に残ることは日本財界人のインテリジェンスの高さである。みな数学のような基礎科学の重要性をよく認識しておられ, さすがであった。

4. 記念切手発行

記念切手発行の条件として, 国際会議の場合には参加国数60以上で参加者数3000人以上という基準が示された。ICM 90はこの基準を楽にクリアしているが記念切手発行を希望する団体等は極めて多く, 基準を満たしているだけでは切手発行は難しいのである。そこで, 関係各方面にICM 90記念切手発行のための助力を依頼した。とくにお世話になった方々は, 片岡清一(元郵政大臣), 古谷亨(元自治大臣, 古屋茂先生の実兄), 吹田愷(自民党通信部会長), 山田達郎(吹田代議士秘書), 小野沢知之(郵政省郵務局長)の各氏である。

90年が明けるとすぐに切手の発行が決まったことが知らされ, 次に切手デザインについての相談をした。デザインの素材を集める段階で, 山口昌哉, 杉浦光夫, 宇敷重広, 青木一芳, 小松彦三郎氏らに助けていただいた。青木氏らと相談していくつかの案を用意し, 郵政省切手技芸官と2度にわたって話し合いをした。とくに青木氏の用意した12面体の折り紙に技芸官の森田氏らはきわめて強い関心と興味を示した。これが下地にあつて, 最終的には(技芸官OB)久野寛氏がデザインした。星型多面体を地球の上に配した美しいもので, 6色グラビア印刷である。発行日はIMU総会の前日である8月17日であり, 総計2100万枚が発行された。

5. 記者会見の準備

87年夏にICM 90開催の記者発表をして以来, 日本数学会の年会と総合分科会で行なう日本数学会の記者会見では毎回ICM 90についての報告と広報活動をした。

日本人がフィールズ賞を受けるらしいという噂と共に報道各社による取材は加熱の様相を呈し, 取材についての打合せが必要になった。8月3日に国立京都会館で開かれたICM 90のための記者発表会での話合に基づき, 京大記者クラブの4人の幹事とfaxで連絡をとりながら, 取材要領(国際数学会議の取材にかんして)をまとめそれをプレス用に配付した。

フィールズ賞受賞者についての資料の発表は受賞時迄はできないが, 夕刊の締め切りの関係を考慮し, 21日の10時に別室で授賞関係資料の配布をした。ただし, 資料に基づく記事の出稿(別室以外へ資料を持ち出すこと)は授賞の発表(10時45分の予定)まで控えること, 資料に基づいた数学者への取材もこの時間まで控えることを要請した。21日の朝には日本人受賞者についての報道

が各社からなされた。これは各社の独自の取材に基づいたものである。授賞式が行われる開会式の撮影についても、きちんと取材グループと打ち合せをし取材要領を‘式の進行を妨げない様充分の配慮をして下さい。定位置取材に努めて下さい。撮影は一般の座席の両側と後部から行って下さい。ただし、授賞式の時に限りステージと座席の間で撮影することができます。この場合でもセンターはあけ、正面のサイドから撮影して下さい。なおステージ上での撮影はご遠慮下さい。’としておいた。実際の開会式では、受賞者の顔の撮りやすい正面右横に報道関係のカメラが多数並んだ。

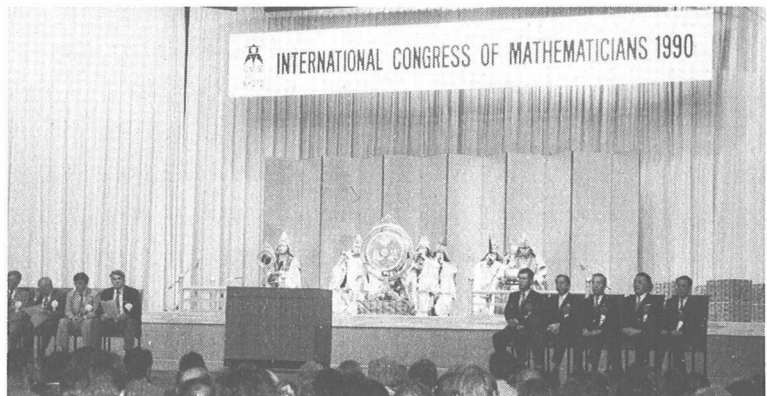
森さんは日本報道陣の格好のネタにされ、写真週刊誌にまで付け狙われて気の毒であった。彼の口からは研究の調子が戻らないという嘆きもきかれた。しかし彼の受賞は久しぶりに日本の基礎科学に世間が注目する好機をつくることになった。再び日本の青少年に純粋数学へのあこがれがよみがえるきっかけとなることが期待される。

6. コンピュータについて

コンピュータと fax が国際会議の準備にきわめて有効であった。もし、コンピュータがこれ程にまで、気軽に使えなかったら事務処理に大変な苦労がつきまとったことであろう。ICM 90 の募金事務を引き受けるに当っては最初にしたことは募金事務のプログラムを作成することであった。初めに簡単なデザインのもとに出発し使いながら逐次改良し半年程でほぼ完成した。N88BASIC で 50 キロ程のソースコードのものである。例えば、郵便番号をいれると自動的に住所欄が半分は埋まるなどの便利な機能をつけた。本来は市販のデータベースプログラムを使う所であるが、BASIC で自作したのはこうすればどんな事態にも対応できるからである。表計算ソフトも有難かった。ただし、能力を過信して、データを詰め込み過ぎて、save はできても load できない状態になり、1 週間の労力が無駄になった。また、データベースと表計算で 2 重に計算してチェックして思わぬミスを防ぐ対策をとっていたが、時には計算があわず、数日に亘ってプログラムと入力データの検討をする羽目になった。結果的には 1 円の狂いも生ずることなしに、特別募金の会計をすませることができた。これには手伝ってくれた学習院大学嘱託、名和田雅子さんの貢献が大きい。

そろばんの使えない私にはコンピュータが無ければ事務処理がまったくできない。コンピュータほど有難いものはないと思う反面、これさえなければ事務をしなくてすんだとの思いもあり、複雑な気持ちである。

(いいたか しげる・学習院大学理学部)



オープニングセレモニー風景